

# 『淡齋百律』全譯註稿（中Ⅰ）

群馬県立女子大学文学部国文科 佐羽淡齋研究会

〔凡例〕

一、本稿は、佐羽淡齋『淡齋百律』の二十一首めから四十首めまでの、凡そ二十首に関する訳註である。原稿は、群馬県立女子大学佐羽淡齋研究会の定例読書会と夏期合宿において、会員（伊藤千夏・岩本若葉・本堂睦季・齊藤菜月・千葉佑惟・菅原彩乃・笹原美憂・多胡遥菜・野田菜桜子・野田楓優音・久木原瑠樹・柳沢祐奈・桐原基範・土山和夫）が発表した資料を、井上が監修した。また、早稲田大学教育・総合科学学術院 内山精也教授に校閲の労を取っていただいた。

一、底本は、高崎市立図書館・俳山亭文庫所蔵『淡齋百律』（文化十年（一八一三）初版）を底本とし、国文学研究資料館所蔵『淡齋百律』（文化十年）、高崎市立図書館所蔵『淡齋百律』（佐羽喜六発行・明治二十七年刊）を参考とした。

一、各訳注の構成は、【本文】および書き下し文、【語釈】、【通釈】を原則とし、詩の着想、典故等、特記する事項のある場合は、【備考】を付した。

一、韻字については、（ ）内に『詩韻（平水韻）』（一〇六韻）の韻目を示し、さらに本文該当箇所右横に◎を記してある。

一、平仄については、本文右横に、平（○）仄（●）を記した。

一、「漢字」については、原則として、【本文】、【韻字】、および【備考】の引用作品本文の部分は、正字体。その他はすべて新字体と

した。

一、「かなづかい」については、漢文訓読の部分は、旧かなづかい。その他は、すべて新かなを用いた。なお、字音は新かなを用いた。

## 021 湖村月夕

湖村の月夕

寂●●●●●	寂寞たり	湖村の晩
波○●●●●	波	平らかにして
寒○●●●●	寒煙	曲浦に籠もり
素●●●●●	素月	円沙に逗まる
籬○●●●●	籬畔	漁網を懸け
舟○●●●●	舟中	釣車を巻く
秋○●●●●	秋声	何れの処にか起こる
簾●●●●●	簾簾として	兼葭に入る

【韻字】斜・沙・車・葭（下平六麻韻）

## 【語釈】

○月夕…①月の出ている夜、②陰暦八月十五夜（仲秋の名月の夜）、③月末、という意味があるが、ここでは①をとる。

○雁影…飛んでゆく雁のかげ。晩唐・許渾「七里灘」に「樹密猿声響、波澄雁影深（樹密にして猿声響き、波澄みて雁影深し）」（『三体詩』巻三）とある。

○寒煙…寒々としたもや。晩唐・吳融「秋色」に「曾従建業城辺過、蔓草寒煙鎖六朝（曾て建業の城辺より過れば、蔓草の寒煙六朝を鎖ざす）」（『三体詩』巻一）とある。

○曲浦…おくまった入り江。北宋・余靖「夏日江行」に「曲浦逗留多、修程夢魂倦（曲浦逗留すること多く、修程〔長い旅路〕夢魂倦む）」（『宋詩鈔』「武溪詩鈔」）とある。

○素月…①白い月、光の明らかな月、②陰暦八月の別名、の意味があるが、ここでは①をとる。東晋・陶潜「雜詩十二首」其二に「白日淪西阿、素月出東嶺（白日西阿に淪み、素月東嶺に出づ）」（『靖節先生集』巻四）とある。

○圓沙…まるい砂洲。湖中の小島を指すか。南宋・楊万里「過宝応県新開湖」に「漁家可是厭塵囂、結屋円沙最尽梢（漁家はれ塵囂を厭ふべし、屋を結ぶ円沙の最も尽くる梢）」（『宋詩鈔』「朝天統詩鈔」）とある（『宋詩鈔』では「厭」を「壓」に作るが、辛更儒校箋『楊万里集箋校』巻三〇〔中華書局、二〇〇七年九月〕に従い改めた）。

○籬畔…まがきの近辺。「籬辺」に同じ。

○釣車…釣り竿の糸巻きのこと。南宋・楊万里「過臨平蓮蕩」に「籬辺随处插垂柳、簷下小船繫釣車（籬辺随所垂柳を挿し、簷下の小船釣車を繫ふ）」（『宋詩鈔』「朝天統詩鈔」）とある。

○秋聲…秋の音。秋風の音や木の葉の落ちる音など。盛唐・李頎「望秦川」に「秋声万戸竹、寒色五陵松（秋声万戸の竹、寒色五陵の松）」（『三体詩』巻三）とある。

○簌簌…擬音語。秋風の音をいう。南宋・楊万里「曉吹黃竹莊三首」

其二に「琤灰簌簌欲飛声、日到牽牛第幾星（琤灰〔玉管が灰を吹く〕の意で、季節が移り変わったことをいう）簌簌として声を飛ばさんと欲し、日び牽牛の第幾星にか到らん）」（『宋詩鈔』「南海集鈔」）とあり、晩唐・韓偓「雨」にも「坐来簌簌山風急、山雨随風暗原隰（坐来簌簌として山風急なり、山雨風に随ひて暗原隰ふ）」（『全唐詩』巻六八一、また『玉山樵人集』）とある。

○蒹葭…水草の代表。オギとアシ。晩唐・許渾「咸陽城東樓」に「一上高城万里愁、蒹葭楊柳似汀洲（一たび高城に上れば万里の愁ひあり、蒹葭楊柳汀洲に似たり）」（『三体詩』巻二）とある。

## 【通釈】

「湖村の月の夜」

ひっそりとももの寂しい湖村の夕べ、湖面の波も穏やかで、飛びゆく雁のかげが斜めに（湖面に）映る。寒々しいもやが入り江に立ち込め、白い月がまるい砂洲に留まっている。（釣り人が）籬の傍らに網をひっかけ、舟に乗って釣り糸を巻いている。秋の音はどこからやってくるのだろうか、ひゅーひゅーと水辺の芦原の中に入り込んだ。

（本堂睦季）

## 022 看梅歸途宿神奈川驛

梅を看し歸途 神奈川驛に宿す

●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●

●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●  
●●●●●●●●

借來石鼎擇泉汲

開得茶籠命僕煎  
木枕慣聽波響臥  
綿衾穩伴雨聲眠  
夢魂到曉呼難醒  
遶盡梅村挂月邊

茶籠を開き得て僕に命じて煎らしむ  
木枕 慣れて波響を聴きて臥し  
綿衾 穩やかに雨声を伴にして眠る  
夢魂 曉に到るまで 呼べども醒め難し  
遶り尽くす 梅村 月を挂くる辺り

【韻字】前・天・煎・眠・邊（下平一先韻）

# 【語釈】

○神奈川驛…東海道五十三次の宿場、神奈川宿。004 「神奈川晚望」

【語釈】参照。

○海畔…海岸。ここは神奈川驛を指す。

○旗亭…ふつうは（中国で旗を立て目印にしたところから）料理屋、酒場をいうが、ここでは、宿屋。元・蔡正孫「客程尋詩」に「踏破千山与万山、旗亭風軟客程寛（踏破す 千山と万山と、旗亭 風軟くして 客程 寛やかなり）」（『聯珠詩格』卷十五）とある。

○歸程…歸りの道のり。

○斂昏…たそがれ時の終わり。「昏」は、『爾雅』（釈詁）に「代也（代はるなり）」とあり、その注に「代、明也（代はるは、明なり）」、疏に「日入後二刻半為昏、昏来則明往、故云代明（日入りて後二刻半を昏と為す。昏来れば則ち明往く、故に明に代はると云ふ）」とある。すなわち、日没後三、四十分程度の時間帯をいう。

「斂」は「収」「蔵」と同義で、しまう、かくれる、の意。南宋・陸游「晚興」に「興来倚杖清江上、断角疏鐘正斂昏（興 来りて杖に倚る 清江の上、断角 疏鐘 正に昏を斂む）」（『劍南詩稿校注』卷七）とある。

○開得…開きおわって。「得」は、動作の実現・完了を表す。

○石鼎…茶具。南宋・周南峯「桂師惠筆」に「換鶯愧殺無義帖、留写弥明石鼎詩（鶯に換ふるに愧殺す 義帖無きを『晋書』王羲之伝の故事を踏まえる）、留写す 弥明が石鼎の詩（中唐・韓愈「石鼎聯句」を踏まえる）」（『聯珠詩格』卷十七）とある。『淡齋百絶』（中）043 【語釈】参照。

○茶籠…茶器を納めるかご。

○木枕…木製の質素な枕。007 「筥根道中」【語釈】参照。中唐・韓愈「嘲鼾睡二首」其一に「木枕十字裂、鏡面生痂瘡（木枕 十字に裂け、鏡面に痂瘡〔あせものような小さな突起〕生ず）」（『全唐詩』卷三四五）とある。

○綿衾…綿でできた粗末な布団。007 「筥根道中」【語釈】参照。北宋・徐積「寄范掾」に「最好綿衾剽典錢、又恐夜寒妻懊惱（最も好きは綿衾 典錢〔質入れして得る金〕剽るも、又た恐る 夜寒くして妻の懊惱せんことを）」（『宋詩鈔』「節孝詩鈔」）とある。

○夢魂…夢を見ている間の魂。唐・張志文「冬夜」に「風擺簾鈴三兩聲、瀟湘屏下夢魂驚（風は擺ふ 簾鈴 三兩の聲、瀟湘の屏下〔瀟湘の山水画が描かれた屏風の下で〕 夢魂 驚く）」（『聯珠詩格』卷十九）とある。

○梅村…梅の村。現在の神奈川県横浜市杉田を指すか。杉田の梅林は、江戸時代から明治にかけて江戸在住の文人墨客が多く訪れた名勝地であった。『淡齋百絶』（下）所収、朝川鼎「桐生故詩人佐羽淡齋君墓記」にも、「其在江戸、春則探梅杉田、曳枯筇、披短簑、冒雨雪於数程（其の江戸に在るや、春は則ち梅を杉田に探ね、枯筇を曳き、短簑を披て、雨雪を数程に冒す）」と記されている。

○挂月…月を引っかける、ぶら下げる、の意。上ってきたばかり、もしくは沈みかかる月が屋根の向こうに輝く様をこう表現する。北宋・蘇軾「庚辰歲人日作、時間黃河已復北流……二首」其二に「不用長愁挂月村、檳榔生子竹生孫（用ひず長に月を挂くるの村を愁ふを、檳榔は子を生みて竹は孫を生む）」（『宋詩鈔』「東坡詩鈔」）と

ある。

【通釈】

「梅の花を見た帰り道、神奈川駅で宿をとる」

海のほとりの旅館は、崖の前にあり、（梅を見て）帰る途中、夕暮れにまた同じ宿をとった。（宿から）石鼎を借りて泉を探して汲み、茶籠を開いて下僕に銘じて茶を淹れさせる。木枕に倚れ、それに慣れた頃、波音を聴きながら横になり、綿の布団を被って穏やかな心持ちで雨音を伴に眠りにつく。明け方に至るまで、夢見る魂は、呼び起こしても覚めることがなく、月が沈みゆく梅の村の辺りを巡りつくしている。

（伊藤千夏）

023 幽居

幽居

小○小○柴○門○短○短○牆○  
竹○圍○柳○遶○護○茅○堂○  
青○錢○苔○蝕○支○琴○石○  
紅○雨○花○沾○攤○帙○牀○  
已○拾○煙○霞○供○畫○本○  
將○追○風○月○老○詩○鄉○  
閑○身○擲○盡○塵○囂○事○  
山○字○屏○閒○夢○始○長○

小小たる柴門 短短たる牆  
竹圍み 柳遶りて 茅堂を護る  
青銭の苔は蝕む 琴を支へる石  
紅雨の花は沾す 帙を攤く床  
すでに煙霞を拾ひて 画本に供するも  
將に風月を追ひて 詩郷に老いんとす  
閑身 擲ち尽くす 塵囂の事  
山字の屏間 夢始めて長し

【韻字】 牆・堂・牀・鄉・長（下平七陽韻）

【語釈】

- 幽居…俗世を避けて静かに暮らすこと。また、その住まい。
- 柴門…木の小枝を編んで作った質素な門。
- 牆…垣根。
- 茅堂…茅葺の家。質素な家の例え。
- 青銭…緑色で丸いものの例え。ここでは緑の苔の比喩。
- 支琴石…琴を置く台石。中唐・白居易「問支琴石」に「天上定応勝地上、支機未必及支琴（天上 定めて応に地上に勝るべきも、機を支ふる（天上の織女が使う機織り器を支える石）は未だ必ずしも琴を支ふるに及ばず）」（『白氏文集』巻六十四）とある。
- 攤帙牀…ゆったりもたれながら読書するための長椅子。「攤帙」は、書物を開く、の意。「牀」は、ここでは「胡床」（縄床）ともいう）のこと。背もたれのある折りたたみ式の長椅子。
- 紅雨…①花に降りそそぐ雨。②赤い花が散る喩え。ここでは②の意味をとる。中唐・李賀「将進酒」に「況是青春日将暮、桃花乱落如紅雨（況や是れ青春 日 将に暮れんとし、桃花 乱落すること紅雨のごときをや）」（『全唐詩』巻三九三）とある。
- 拾煙霞…山中奥深くに入り、高嶺に登って雲煙を足下に望むこと。「煙霞」には、①もや、②山水の美しい景色、③浮世等の意があるが、ここでは②をとる。南宋・范成大「初入大峨」に「煙霞沈痼不須医、此去真同汗漫期（煙霞の沈痼「山水の美景に魅入られ、それが長患いといえるまで常軌を逸している意」医を須ひず「医者要らず」、此より去りて真に汗漫の期「天の果てで神仙と会う約束」に同じからん）」（『石湖詩集』巻十八）とある。
- 供畫本…絵画を描くのに役立てる、の意。淡齋が山水画を描いたか否かは未詳。ここでは、おそらく叙景の詩句を詠じることを、このように称したのであろう。



○風月…①自然の美しい景色、②風流・風雅、③自然の風物を題材に作る詩文、の意がある。ここでは②の意味をとる。

○老詩郷…（現実の風景の中ではなく）詩の中の、心の故郷にあつて年老いてゆく、ということか。「詩郷」の語は、中国の詩には先例が見当たらない。

○塵囂…世間の乱れや騒がしさ。東晋・陶潜「桃花源記」に「借問游方士、焉測塵囂外（借問す 方に遊ぶの士、焉ぞ測らん 塵囂の外を）」（『靖節先生集』巻五）とある。

○山字…山の字の形をした屏風。南宋・陸游「龜堂晨起」に「屏圍燕几成山字、簾展涼軒作水紋（屏は燕几「寄りかかって休む小机、脇息の類」を囲みて山字を成し、簾「ゴザ」は涼軒に展べて水紋を作す）」（『劔南詩稿』巻四十六）とある。

### 【通釈】

「静かなすまい」

小さな柴門に背の低い垣根、竹や柳が茅葺の家を護るようにとり囲んで生えている。琴を支える石に緑の苔が生え、読書の時にもたれる長椅子には花弁がはらはらと落ちる。これまで山水の眺望をほしいままにしては、絵に描くのに役立てていたけれども、これからは（この住まいのなかで）風雅を求めて詩の世界に年老いてゆこう。閑な身の私は、世間の煩わしさをすっかり捨て去った。かくて、山字の形の屏風の間で寝転んでようやく深い眠りに落ちてゆく。

（齊藤菜月）

### 024 登慈雲寺

慈雲寺に登る

香閣・峻嶒出世氣

香閣 峻嶒として

世氣を出づ

登臨○見○句○日○將○

登臨し 句を覓むれば 日 將に暁る

んとす

一樓○晴○開○三○面○

一樓の情景 三面に開き

四野○春○光○過○五○分○

四野の春光 五分を過ぐ

松○塢○柳○叢○沿○水○見○

松塢 柳叢 水に沿ひて見

鶯○聲○燕○語○倚○欄○聞○

鶯声 燕語 欄に倚りて聞く

飄○然○已○在○半○天○裏○

飄然として已に在り 半天の裏

身○似○無○心○出○岫○雲○

身は似たり 無心にして岫を出づる雲

【韻字】 氣・暁・分・聞・雲（上平一二文韻）

### 【語釈】

○慈雲寺…おそらく群馬県桐生市西山の慈雲閣を指す。【備考】参照。

○世氣…世の中の煩わしさ。中唐・李徳裕「贈奉律上人」に「知君学地厭多聞、広渡群生出世氣（知る君 学地（仏教語。修行の段階）にして多聞を厭ひ、広く群生に渡りて世氣を出づるを）」（『全唐詩』巻四七五）とある。

○香閣…寺院。盛唐・孫逖「宿雲門寺閣」に「香閣東山下、烟花象外幽（香閣 東山下、烟花 象外に幽なり）」（『唐詩選』巻三）とある。

○峻嶒…山の高くけわしく重なるさま。南宋・徐照「送塵老歸旧房」に「数間茅屋残山外、片石峻嶒樹影交（数間の茅屋 残山の外、片石 峻嶒として 樹影 交はる）」（『宋詩鈔』「芳蘭軒詩鈔」）とある。

○登臨…高い所に登って下を見渡すこと。盛唐・岑参「与高適・薛據

同登慈恩寺浮図」に「登臨出世界、磴道盤虚空（登臨 世界を出で、磴道 虚空を盤る）」（『唐詩選』卷一）とある。

○覓句…詩人が苦吟して句を求めること。

○曛…①入日の光、②入日、③黄昏、日暮れ、夕方、という意味があるが、ここでは③をとる。初唐・韋承慶「江樓」に「独酌芳春酒、登樓已半曛（独り酌む 芳春の酒、樓に登れば已に半ば曛る）」（『全唐詩』卷四十六）とある。

○春光…①春の光、②春の気配、色彩。「春色」の類語。ここでは、②をとる。

○五分過…春の盛りまですでに半ばを過ぎたということ。北宋・劉敞「嘯亭雨後」に「層軒独立時惆悵、淮北春光過五分（層軒 独り立てば 時に惆悵たり、淮北の春光 五分を過ぎたり）」（『公是集』卷二十九）とある。

○塢…①土手、②砦、③村、④窪んだところ、という意味があるが、ここでは①をとる。『淡齋百絶』（下）<sup>086</sup>【語釈】参照。

○欄…手すり。『淡齋百絶』<sup>056</sup>【語釈】参照。

○出岫雲…山の穴から起こる雲。【備考】参照。

#### 【通釈】

「慈雲寺に登る」

慈雲寺は険しい高山にあり、世の中の煩わしさから脱け出ている。ここから山の下を見渡しながら良い詩を作ろうと苦心していたところ、いつの間にか日が暮れそうになっていた。この高殿に登ると、晴れた景色が三方に広がり、四周の郊外に広がる春の景色は、もはや春の盛りの半ばを超えたみたいだ。松の生えた土手と柳の茂みが川沿いに見えて、鶯と燕の鳴き声を手すりに寄りかかりながら聞く。今、自分分は飄然として空中に身を置いているので、まるで我が身は無心に山を出でる雲になったかのようなのだ。

#### 【備考】 1

語釈に記したように、「慈雲寺」がもしも桐生西山の「慈雲閣」と同一の場所を指すのであれば、淡齋が師事した大窪詩仏に、以下のような詩がある。

登慈雲閣 慈雲閣に登る

題注「閣在桐生西山。上毛・下毛之山、歴歴可數。子十餘年前曾來

遊云（閣は桐生の西山に在り。上毛・下毛の山、歴歴として数ふべし。子 十余年前 曾て來遊せりと云ふ）」

登登磴道上屏顔 磴道を登り登りて 屏顔（高峻のさま）なるに上る  
閣在層風縹渺間 閣は在り 層風（重なるもや） 縹渺（遙かに広

い）たる間

幾縷人煙村陸續 幾縷の人煙 村 陸續

一行竹樹水彎環 一行の竹樹 水 彎環

歸雲乍向檐前没 歸雲 乍ち檐前に向りて没し

棲鳥時從檻外還 棲鳥 時に檻外より還る

忍拂舊題看歲月 忍んで旧題を払へば 歲月を見る

二毛重對二毛山 二毛（白髪まじり。中年）重ねて對す 二毛  
（上毛、下毛）の山

（『詩聖堂詩集』二編）

大窪詩仏が桐生を訪れたのは、享和二年（一八〇二）九月と、文化十年（一八一三）十一月、の二回である。右の題注によれば、「慈雲閣」には十数年前に登った、ということだから、本詩は、後者、文化十年（四十七歳）の作だと考えられる。一方、淡齋詩の「慈雲寺」は、「慈雲閣」同様、登臨の樓閣であること、桐生にあること、の二点から、同一場所を指す可能性が高い。ただ、淡齋詩は春の作なので、詩仏の右詩と同時の作ではない。

この詩の最終句は、陶淵明「帰去来兮辞」の次の句に基づく。

雲無心以出岫　　雲は無心にして以て岫を出で

鳥倦飛而知還　鳥は飛ぶに倦みて還るを知る

景翳翳以將入 景は翳翳として以て將に入らんとし

撫孤松而盤桓 孤松を撫して盤桓す

（『靖節先生集』卷五）

（菅原彩乃）

幽居ゆうきよ

春○雨●纔○晴○處●

春雨しゅんう 纔わづかに晴はるる処ところ

門○  
前○  
綠●  
漲●  
溪◎

門前もんぜん 緑みどり 溪けいに漲みなぎる

花閒雙燕語

花間かかん  
双燕そうえん  
語かたり

柳●  
外●  
一●  
鷺○  
啼◎

柳外りゆうがい  
一鶯いちおう  
啼なく

雲○盡●山○偏○近●

雲くも 尽つきて 山やま 偏ひとへに近ちかく

松○  
高○  
屋●  
更●  
低◎

松<sup>まつ</sup>高<sup>たか</sup>くして  
屋<sup>おく</sup>更<sup>さら</sup>に低<sup>ひく</sup>し

幽○  
居○  
風○  
物●  
足●

幽居ゆうきよ  
風物ふうぶつ  
足たる

收取新題

収取しゅうしゅして新題しんだいに入れいん

【韻字】溪・啼・低・題（上平八齊韻）

○幽居.. 俗世間を避けて静かに暮らすこと、またその住まい。『淡斎百絶』(上) 023 【語釈】 参照。

○纔晴處..ようやく晴れ上がった時の意。〔纔〕は、やっと・ようやく

く、の意。「處」は、ここでは「時」に同じ。

○偏..強調の語。ここでは「ひたすら」の意。『淡斎百絶』(中) 054

【語釈】参照。

○風物・風光、景物のこと。『淡斎百絶』(上) 023 【語釈】参照。

○收取..(ありあまる風物を) 受け取るの意。

○新題…新しい詩。北宋・趙抃「平溪堂」に「下筆新題無俗事、撻箠

野服は家常（筆を下し）新たに題すれば 俗事 無く、  
 筈を搯へ

野服するは 是れ家常なり」(『宋詩鈔』「清獻集」)とある

「静かなすまい」

春雨がようやく晴れて、門の前の緑が谷川に満ちあふれている。花の中で二羽の燕が嘯り、柳の向こう側では一羽の鶯が鳴いている。雲がなくなると山はひたすら近くなり、松の木が高いと家はますます低く感じる。世をさけた静かな住まいには美しい景色が多いため、取り収めて新しい詩に取り入れよう。

(千葉佑惟)

026  
水村春曉

水村の春暁

宿霧遮前面

宿霧 しゆくむ  
前面を遮り ぜんめん さへぎ

○晨光如隔紗  
○青迷兩岸柳  
○紅暗一村花  
○眠犢依芳草  
○棲鳧聚暖沙  
○桔槔聲起處  
○竹裏是人家

晨光 紗を隔つるがごとし  
青は迷ふ 兩岸の柳  
紅は暗し 一村の花  
眠犢 芳草に依り  
棲鳧 暖沙に聚る  
桔槔 声 起こる処  
竹裏 是れ人家なり

【韻字】紗・花・沙・家（下平六麻韻）

【語釈】

○宿霧…前の晩から立ちこめる霧。盛唐・于良史「冬日野望」に「地際朝陽滿、天辺宿霧收（地際 朝陽 滿ち、天辺 宿霧 収まる）」（『三体詩』卷六）とある。

○晨光…朝日の光。

○青迷の句…「下三連」の違反。

○青迷…青色（黄緑）がただよの意。柳の若葉が風に揺れる様をこのように表現した。「迷」は、行きつ戻りつ漂うこと。北宋・文彦博「芳草」に「碧映龍池水、青迷楚沢魂（碧は映ず龍池の水、青は迷ふ楚沢の魂）」（『潞公文集』卷三）とある。

○紅暗…紅色がほの暗く目に映る意。南宋・楊万里「東園晴歩二首」其一に「浅暖疏寒十日晴、桃花紅暗李花明（浅暖 疏寒 十日 晴 れたり、桃花は紅暗にして李花は明かなり）」（『誠齋集』卷三十七）とある。

○眠犢…寝そべって眠る牛。「犢」は、こうし。南宋・陸游「舟過梅塢胡氏居、愛其幽邃、為賦一詩」に「一堤茂草有眠犢、数掩短籬無

吠彪（一堤の茂草 眠犢 有り、数しば短籬に掩はれて吠彪（吠えかかる犬）無し）」（『劔南詩稿』卷二十二）とある。

○棲鳧…憩うカモ。底本は、「栖」に作る。「棲」と同音同義。憩うの意。「鳧」は、かも。ガンガモ科の渡り鳥、のがも。中唐・張籍「和蘇仲南部湖會飲三首」其一に「寒塘沈沈柳葉疏、水暗人語驚棲鳧（寒塘 沈沈として 柳葉 疏なり、水 暗くして 人語 棲鳧を驚かす）」（『張司業集』卷七）とある。

○桔槔…はねつるべ。井戸水を汲み上げる仕掛け。柱の上に横木を渡し、その一端に石を、他の端につるべをつけて、水を汲み上げる。

北宋・韓維「城西書事五首」其三に「密竹乱流行徑絶、桔槔鳴処是人家（密竹 乱流 行徑 絶え、桔槔 鳴く処 是れ人家）」（『宋詩鈔』「南陽集鈔」）とある。

【通釈】

「水辺の村の春の夜明け」

夕べからの霧が視界を遮り、まるで朝日に紗がかかったかのようだ。兩岸の柳の葉は、（風に）漂い、村中の花はぼんやりとして赤い。眠る子牛は香りのよい草に横たわり、村に憩うカモは暖かい水辺に集まっている。つるべの音がしたあたり、あの竹やぶの中が人家なのだとわかった。

（本堂睦季）

027 梅溪

梅溪

○前程山乍轉  
○望眼失東西  
○兩岸梅千樹

前程 山 乍ち転じて  
望眼 東西を失ふ  
兩岸 梅 千樹

孤舟月一溪

孤舟 月 一溪

近飄如雪點

近く飄ひて雪のごとく点じ

遠望與煙迷

遠く望めば煙と迷ふ

此景眞奇絶

此の景 眞に奇絶なるに

詩人還缺題

詩人 還つて題するを欠く

【韻字】 西・溪・迷・題（上平八齊韻）

# 【語釈】

○梅溪…梅の咲くたにがわ。場所は未詳。

○轉…変化すること。

○前程…行くさきのみちのり。前途。中唐・李端「宿淮浦、寄司空曙」に「別恨転深何処写、前程唯一登楼（別恨 転た深くして 何れの処にか写さん、前程 唯だ有り 一登楼）」（『三體詩』卷二）とある。

○望眼…遠くを眺める目。北宋・孔平仲「口占」に「常是登高牽望眼、醉吟今喜在江湖（常にはれ登高 望眼を牽き、醉吟して今 喜ぶ 江湖に在るを）」（『宋詩鈔』「清江集鈔」）とある。

○失東西…方向を失う。「東西」は「方向」の意。

○點…ここでは「したたる」、「おちる」の意。雪片が舞い落ちるかのよう、梅の花弁が舞い落ちることをいう。

○與煙迷…（遠望すると、白梅が一面に咲き乱れて）もやが漂っているのかと見紛うくらい、の意。

○奇絶…この世のものと思われないほど素晴らしい、の意。

○缺題…ふつう「無題」と同じく、タイトルの失われた作品をいうが、ここではおそらく（絶景を前にして感動のあまり）詩を作ることを忘れる、の意であろう。用例未詳。「題」は、詩を作つて、記

念とすること。

## 【通釈】

「梅溪」

前途でにわかに山の形が変わり、私の目は方角を見失った。兩岸には梅が千樹、谷間の月のもとを一槽の舟でゆく。梅の花びらが雪のように落ちてゆき、遠くに目をやるともやで満ちている。この景色は本当にすぐれてめずらしいものであるのに、私はかえって詩を詠むことを忘れてしまった。

（岩本若葉）

## 028 暮春閑居

暮春閑居

一桁青山一區宅

一桁の青山 一區の宅

松門小處仄蹊通

松門 小き處 仄蹊 通す

林鶯隱葉如逃迹

林鶯 葉に隠れて 迹を逃るるがごとく

梁燕營巢將畢功

梁燕 巢を営みて 將に功を畢へんとす

濃綠滴窗新竹雨

濃綠 窓に滴る 新竹の雨

紛紅滿地落花風

紛紅 地に満つ 落花の風

意行偶遇雙雙筍

意行して偶たま遇ふ 双双の筍



●●●●●  
 刷破錦文苔半弓

錦文きんもんを刷破ちよくはすれば 苔こけ 半弓はんきゆう

【韻字】通・功・風・弓（上平一東韻）

【語釈】

○一桁青山…衣桁のように横に連なる青々とした山々。「桁」は、衣桁のことで、緑の山々が横に連らなる様を表す。元・郝經「入燕行」に「南風緑尽燕南草、一桁青山翠如掃（南風 緑にし尽くす 燕南の草、一桁の青山 翠 掃ふがごとし）」（『陵川集』巻九）とある。

○一區宅…屋敷ひとつ。「区」は宅地・屋敷を数える量詞で、「処」や「所」に同じ。北宋・文同「寄紀禪師」に「水田百畝一區宅、帰老城南何日能（水田 百畝 一區の宅、城南に帰老すること 何れの日にか能くせん）」（『丹淵集』巻十三）とある。

○一桁青山の句…子類特殊形式（挟み平）。「淡齋百絶」（上）001【語釈】を参照。また、韻の踏落とし、となっている。

○仄蹊…傾斜の急な小道。「仄」は、傾くの意。「蹊」は、普通、「徑」字を用いるが、平仄の都合で「蹊」としたものか。北宋・孔武仲「蘇子瞻雪堂」に「古泉東辺仄徑開、先生曾此斷蒿來（古泉の東辺 仄徑 開き、先生 曾て此に蒿を斷り来れり）」（『宋詩鈔』「清江集鈔」とある。

○逃迹…迹（足跡、痕跡）を逃す。姿をくらます、隠遁する。「屏迹」に同じ。北宋・釈惠洪「次韻双秀堂」に「人如巢許逃名迹、山学娥英露髻鬟（人は巢許「堯の時代の隠者、巢父と許由」のごとく名迹を逃れ、山は娥英「堯の娘で舜の妃、娥皇と女英」に学んで髻鬟を露はす）」（『石門文字禪』巻十二）とある。

○將畢功…まもなく功（仕事・巢作り）を終えようとする。

○粉紅…ももいろ、ピンク。桜や桃の花弁を指す。

○意行…もの思いしつゝ進むこと。南宋・陸游「閑遊所至少留、得長

句五首」其二に、「垣屋参差桑竹繁、意行漫漫不知村（垣屋 参差として 桑竹 繁く、意行 漫漫として村を知らず）」（『宋詩鈔』「劍南詩鈔」とある。

○雙雙箭…（小道の両側に）一対ずつ生えるタケノコ。

○刷破…ナイフやなたで切り取る。晩唐・杜荀鶴「新栽竹」に「刷破蒼苔色、因栽十数茎（刷破す 蒼苔の色、因りて栽う 十数茎）」（『全唐詩』巻六百九十一）とある。

○錦文…にしき、錦模様。ふつう、美しい花を指すが、ここでは筍をいうか。

○半弓…二、三尺のこと。「弓」は土地を測る長さの単位で、一弓は六尺。「半弓」は一平米よりやや小さい、わずかな面積をいう。南宋・楊万里「閑居初夏午睡二絶」其二に「松陰一架半弓苔、偶欲看书又嬾開（松陰 一架 半弓の苔、偶たま書を看んと欲するも又た開くに嬾し）」（『宋詩鈔』「誠齋詩鈔」とある。

【通釈】

「暮春のひま暮らし」

衣桁の様に連なる緑の山々、その前にぼつと一つある屋敷。小さな松の門をとおつて、急な小道が通じている。林の鶯は、まるで俗世間を避けるかのように葉に隠れ、梁の上の燕は、まもなく巢作りの仕事を終えようとしている。濃い緑が窓に滴り落ちるように見えるのは若竹に降りかかる雨のせい、薄桃色が地面一杯にしているのは花を散らす春風のせい。もの思いに耽りながら歩いていると、タケノコが一対ずつのびているのに出くわした。錦の紋様のようなタケノコを切り取ると、後には半弓ほどの苔が広がっていた。

（土山和夫）

## 029 足尾山中

あしおさんちゅう  
足尾山中

○危橋疏織竹

ききょう 疎らに竹を織り

●險棧密纏藤

けんさん 密く藤を纏ふ

○山貯三冬雪

やま たくは 三冬の雪を

○人敲六月冰

ひと たた 六月の氷を

●谷聞贊名鳥

たに 聞き 名を贊へられし鳥

●菴住寫經僧

いはり 住す 經を写す僧

●漸覺前程暝

やうや ぜんてい 前程の暝きを覚えしとき

○林間見一燈

りんかん 一灯を見る

【韻字】藤・冰・僧・燈（下平十蒸韻）

## 【語釈】

○足尾山…栃木県日光市足尾町にある山。足尾銅山。『淡齋百絶』

（下）075「秋晚足尾山中」を参照。

○危橋…高い橋。018「郊行」参照。

○險棧…険しい断崖につくられた棧道。蜀の棧道が著名。木柱を断崖に刺し、その上に板を渡して通り道にしたもの。中唐・雍陶「西帰出斜谷」に、「行過險棧出褒斜、出尽平川似到家（險棧を行き過ぎて褒斜を出づ、平川に出で尽くせば家に到るに似たり）」（『三休詩』卷一）とある。

○三冬…①孟冬（陰曆十月）、仲冬（十一月）、季冬（十二月）の三ヶ月の総称、②三度冬を経ること、三年、という意味があるが、こ

では①をとる。

○六月冰…陰曆六月の暑気の候に残る氷のこと。北宋・李復「種説山居二首」其一に「六月取水自鑿谷、百壺進酒不論金（六月 氷を取らんとして自ら谷を鑿ち、百壺 酒を進めて金を論ぜず）」（『滴水集』卷十四）とある。

○谷聞の句…子類特殊形式（はさみ平）。

○贊名鳥…用例未詳。おそらくホトトギスを指すであろう。ホトトギスは、カヅコウ科カヅコウ目の渡り鳥で初夏に渡来する。鳴き声は「テツペンカケタ」に聞こえる。杜鵑、子規、不如帰、郭公、時鳥等の称がある。中国では、蜀の望帝（杜宇）が化した鳥として知られ、望郷の鳥とされる。盛唐・杜甫に「杜鵑行」がある（『全唐詩』卷二一九）。

## 【通釈】

「足尾山中」

谷の高くに架けられた橋は竹を疎らに織ったもので、険しい断崖に通された棧道にびっしり藤の蔓が纏わりついている。山には三ヶ月分の雪が降り積もっており、人は夏六月の氷を叩いて割る。谷からは、名にし負う鳥の鳴き声が聞こえ、庵には写經の僧が住んでいる。段々と前路の暗さに気づいたところで、林の中にぼつと一つ灯りが見えた。

（菅原彩乃）

## 030 初夏村居

初夏 村居

●映門山色屬啼鵑

門に映ずる山色 啼鵑に属す

○輕暖今朝已卸綿  
○春盡詩猶負清債  
○日長眠儘得閑權  
○風清舍北千竿竹  
○雨足溪南十畝田  
○別有吾家新富貴  
○滿池荷葉萬青錢

輕暖なる今朝 已に綿を卸す  
春 尽き 詩 猶ほ清債を負ひ  
日 長く 眠り 儘く閑權を得たり  
風は清し 舍北 千竿の竹  
雨は足る 溪南 十畝の田  
別に吾が家の新しき富貴 有り  
池に満つ荷葉 万の青錢

【韻字】鵲・綿・權・田・錢（下平一先韻）

【語釈】

○映門…門を照らす。盛唐・王昌齡「送郭司倉」に、「映門淮水緑、留騎主人心（門に映ず 淮水の緑、騎を留む 主人の心）」（『全唐詩』卷一四三）とある。

○山色…山のけしき。「色」は、気配、様子。

○啼鵲…ホトトギス。

○輕暖…うす暖かいこと。南宋・陸游「快晴」に、「新陽蘇醒春前柳、輕暖医治雪後梅（新陽は春前の柳を蘇醒し、輕暖は雪後の梅を医治す）」（『宋詩鈔』「劍南詩鈔」）とある。

○卸綿…綿着を脱ぐこと。「卸」は、とりのぞく。

○春盡の句…子類特殊形式（はさみ平）。

○清債…作詩の借り・負債。「債」は、果たすべき責任。ここは、作るべき詩を作らない、「詩債」を謂う。

○閑權…ひまである權利。北宋・林逋「城中書事」に、「一門深掩得閑權、純白遺風要独全（一門 深く掩ぎして閑權を得たり、純白の遺風 独全なるを要す）」（『林和靖先生詩集』卷二）とある。

○荷葉…蓮の葉。

○青錢…草の葉や苔など、色が青く、形の丸いものに喩える。ここは、蓮の葉を指す。023「幽居」【語釈】参照。

【通釈】

「初夏の村住まい」  
門前に反映する山の景色は、ホトトギスのもの。今朝はうらかなので、綿の服を脱いでした。春が終わったけれど、詩はまだできておらず借りを残したまま、日が長くなったが、ひたすら眠ることだけが、閑人の權利を行使する道である。家の北には千本もの竹が生い茂って清らかな風が吹き、谷川の南の十畝の田畑に雨が充分に降る。それと別に、わが家には新しい富が見つかった。池に満ちる蓮の葉は、一万の青錢である。

（千葉佑惟）

031 初夏

○春尾夏頭霧雨餘  
○苔深門巷綠如梳

初夏

し  
春尾 夏頭 霧雨の余  
苔は門巷に深くして 緑 梳るがごと

○蝸泥斜寫版扉篆  
○蛛網橫封竹架書  
○石首來時棟花後

蝸泥 斜めに写す 版扉の篆  
蛛網 横に封ず 竹架の書  
石首 來たる時 棟花の後

辛夷落處子規初  
料思暑月薰風好  
移種新荷遍小渠

辛夷 落つる処 子規の初め  
料り思ふ 暑月 薫風 好ければ  
移種せし新荷 小渠に遍きを

【韻字】餘・梳・書・初・渠（上平六魚韻）

【語釈】

○門巷…①門、②門の前にある小道。ここでは②をとる。

○如梳…整然とした様。南宋・陳淵「次韻吳參議病中懷歸因以自見」に「柳糸垂地整如梳、春尽長懷旧隱居（柳糸 地に垂れて 整ふことと梳るがごとく、春 尽き 長に懷ふ 旧隱居）」（『默堂集』巻九）とある。

○蛸泥…かたつむりが這った跡、その粘液のこと。『淡齋百絶』（中）

032 【語釈】参照。

○版扉…板の扉。『淡齋百絶』（中） 032 【語釈】参照。

○竹架…竹製の書棚。

○蛛網の句…子類特殊形式（挟み平）。

○石首…石首魚の略。いしもち。頭に二箇の石状の小塊があることから名づく。

○棟花…喬木の名。おうちの花。幹は高く、花は淡紫色で夏開く。南宋・范成大「四時田園雜興六十首」の「晚春田園雜興十二絶」其十一に「荻芽抽筍河魴上、棟子開花石首来（荻芽 筍を抽んで 河魴（フグ） 上り、棟子 花 開きて 石首 来たる）」（『宋詩鈔』「石湖集」）とある。

○石首の句…はさみ平。

○子規…ホトトギス。

○辛夷…落葉喬木、コブシ。山野に自生し、夏蕾を生じ、翌年の春末、白色大形の花を開く。北宋・王安石「送彦珍」に「柘岡定有辛

夷発、亦見東風使我知（柘岡 定めて辛夷の発く有らん、又た東風の我をして知らしむるを見ん）」（『宋詩鈔』「臨川詩鈔」）とある。

○料思…推し量る。「料度」の類語。

○暑月…夏月。大体、陰暦六月前後、小暑・大暑の時期を指す。中唐・白居易「新昌閑居、招楊郎中兄弟」に「暑月貧家何所有、客来唯贈北窓風（暑月 貧家 何の有る所ぞ、客 来たり 唯だ贈る 北窓の風）」（『白氏文集』巻五十五）とある。

○薫風…南方の風。また、温和な風。さらに風が吹くさま。南宋・楊万里「月下果飲」に、「如何独立薫風裏、猶恐霜華点髭根（如何ぞ独り薫風の裏に立ち、猶ほ恐る霜華の鬚根に点するを）」（『宋詩鈔』「荊溪集鈔」）とある。

○移種…移植すること。「種」は、植える意の動詞。

○新荷…新しく芽を出した蓮。

【通釈】

「初夏」

春の終わり夏の初めの頃、霧雨が降った後には、門のあたりは苔むして、梳ったかのように整然と緑一面になっている。かたつむりが這った跡は、板の扉の上に斜めに篆書を書き残し、蜘蛛の糸は縦横に竹の書棚の本を封じ込めている。石首が遡上する頃、棟の花の盛りが終わり、こぶしの花が落ちる頃、ほととぎすが鳴き始める。これから暑月の頃になって、薫風がほどよく吹けば、移し植えたばかりの蓮は、小さな池一杯に繁ることだろう。

（野田菜桜子）

## 032 蛙聲

蛙の聲かへるこゑ

近則聲粗遠則清

近づけば則ち声粗く遠ざかれば則ち清し

如呼如答果何情

呼ぶがごとく答ふるがときも果たして何の情ぞ

菱荷橋畔風初淨

菱荷の橋畔風初めて淨く

楊柳塘邊雨正晴

楊柳の塘邊雨正に晴る

鼓吹水中喧兩部

水中に鼓吹して兩部喧しく

笙歌月裏湧三更

月裏に笙歌して三更に湧く

詩人元是聽無厭

詩人元より是れ聴いて厭くこと無

一任公私自在鳴

一へに任す公私自在に鳴くに

【韻字】清・情・晴・更・鳴（下平八庚韻）

## 【語釈】

○菱荷…ひしと蓮。ひしは、ヒシ科の水生の一年草で、池沼・河川に自生する。蓮は、スイレン科の多年草で、池や水田で広く栽培される。葉は水面に抜き出て、夏には白色または紅色の花をつける。北宋・黃庭堅「鄂州南樓書事四首」其一に「四顧山光接水光、凭欄十里菱荷香（四顧すれば 山光 水光に接し、欄に凭れば 十里 菱荷 香し）」（『聯珠詩格』卷六）とある。

○鼓吹…太鼓や笛の類い。また、それを鳴らすこと。「蛙鼓」という語があるように、ここでは蛙のにぎやかな鳴き声のことを指す。

○兩部…中国唐代の音楽の立部と坐部。転じて、多くの蛙の鳴き声。北宋・蘇軾「次韻述古過周長官夜飲」に「已遣乱蛙成兩部、更邀明月作三人（已に乱蛙をして兩部を成さしめ、更に明月を邀へて三人と作る）」（『宋詩鈔』『東坡詩鈔』）とある。蘇軾の句は、南朝齊・孔稚珪の故事を踏まえる。『南史』卷四十九「孔珪（孔稚珪）伝」に以下のようにいう。「珪風韻清疏、好文詠、飲酒七八斗。……居宅盛營山水、憑几獨酌、傍無雜事。門庭之内、草萊不翦。中有蛙鳴、或問之曰、『欲為陳蕃乎』。珪笑答、曰『我以此當兩部鼓吹、何必効蕃』。王晏嘗鳴鼓吹候之、聞群蛙鳴、曰『此殊聒人耳』。珪曰、『我聴鼓吹、殆不及此』。晏甚有慚色（珪 風韻清疏にして、文詠を好み、酒を飲むこと七八斗。……居宅 盛んに山水を営み、几に憑り（脇息にもたれ）独り酌し、傍に雜事 無し。門庭の内、草萊 翦らず（雜草は生え放題）。中に蛙鳴 有り、或ひと之に問ひて曰く、『陳蕃（後漢の名臣。清廉剛直で知られる）』とならんと欲するか」と。（孔）珪 笑ひ答へて曰く、『我 此れを以て兩部の鼓吹に當つ。何ぞ必ずしも蕃に効はん』と。王晏 嘗て鼓吹を鳴らして之を候へ、群蛙の鳴くを聞きて曰く、『此れ殊に人耳に聒し』と。（孔）珪 曰く、『我 鼓吹を聴くも殆ど此れに及ばず』と。（王）晏 甚だ慚色有り」。

○笙歌…笙に合わせてうたう歌。012【語釈】参照。

○三更…五更の第三の時刻。今の午後十一時から午前一時ごろ。『淡齋百絶』（上）006【語釈】参照。

○公私…公私の別なくの意。『晋書』卷四「惠帝紀」の以下の故事を踏まえる。「帝又嘗在華林園、聞蝦蟇聲、謂左右曰、『此鳴者為官乎、私乎』。或対曰、『在官地為官、在私地為私』。」（帝 又た嘗て華林園に在りしとき、蝦蟇の声を聞きて、左右に謂ひて曰く、『此の鳴く者 官と為すか、私たるか』と。或ひと対へて曰く、『官地



に在らば官と為し、私地に在らば私と為すなり」と。

【通釈】

「蛙の声」

蛙の声は近づいて聴くと粗野だが、遠ざかって聴くと清々しい。呼びかけたり答えたりしているように聞こえるけれど、一体どのような思いで鳴いているのだろうか。菱や蓮の繁る橋のたもとあたり、風がようやく澄みわたってくるころ、そして柳のある池のほとり、雨がちょうど上がったとき（蛙は鳴き始める）。蛙が水中で鼓吹する、その声は立部と坐部とを演奏しているかのようであり、半夜は、あたかも月明かりの中から湧き起こる笙歌のようだ。詩人であるこの私はずっとよりこの声を聴きあきることなく、彼らに公私の別なく自在に鳴くままにさせている。

（笹原美憂）

033 移竹

竹を移す

喜此歳寒節  
分君地半弓  
粉姿先落水  
緑影已凌空  
孤枕宜聽雨  
滿窗堪貯風

喜ぶ 此の歳寒の節  
君に地の半弓を分かつを  
粉姿 先づ水に落とすとき  
緑影 已に空を凌ぐ  
孤枕 雨を聴くに宜しく  
満窓 風を貯ふるに堪へたり

清癯吾到底  
爾汝欲相同

清癯 吾 到底し  
爾汝と相ひ同じからんと欲す

【韻字】弓・空・風・同（上平一東韻）

【語釈】

○移竹…竹を移植すること。盛唐・杜甫「入宅三首」其一に「花垂欲移竹、鳥窺新捲簾（花垂れて 竹を移さんと欲し、鳥 窺ひて 新たに簾を捲く）」（『杜工部集』卷十六）とあるほか、中唐・白居易「新居早春二首」其二に「呼童遣移竹、留客伴嘗茶（童を呼びて竹を移さしめ、客を留めて伴ひて茶を嘗む）」（『白氏文集』補遺卷上）とある。

○歳寒…年末、一年のうちで最も寒い時節。

○半弓…三尺のこと。「弓」は土地を測る長さの単位で、一弓は六尺。南宋・楊万里「閑居初夏午睡二絶」其二に「松陰一架半弓苔、偶欲看書又嬾開（松陰 一架 半弓の苔、偶たま書を看んと欲するも又た開くに嬾し）」（『宋詩鈔』「誠齋詩鈔」）とある。028【語釈】参照。

○粉姿の句…梅がすべての花木に先がけて真っ白な姿を水面に映し出す頃、の意。「粉姿」は、ここでは白梅を指す。「粉」は、おしろいのことで、白の隠喩。明・劉績「題宋院人画著苔梅」に「緑鬬疊仙帔、粉姿疑笑人（緑鬬「緑色の毛氎」 仙帔「仙人の着るうちかけ」を疊ね、粉姿 人を笑ふかと疑ふ）」（『石倉歷代詩選』卷三三八、明詩初集五八）とある。

○緑影…みどりの影。ここでは竹の姿を指す。中唐・李賀「竹」に「入水文光動、抽空緑影春（水に入りては 文光 動き、空に抽んでは 緑影 春なり）」（『昌谷集』卷一）とある。

○孤枕…ひとり寝の枕。独り寝の意。009【語釈】参照。

○清癯…清らかで痩せている。「癯」は「臞」と同字で痩せる、の

意。南宋・方岳「苒堅之苒從竹者非載賡呈似」に「竹丈夫哉能崛強、梅兄弟者亦清癯（竹は丈夫なるかな 能く崛強たり、梅は兄弟なる者にして亦た清癯たり）」（『秋崖集』卷十一）とある。

○到底…ふつうは、結局、つまるところの意の副詞だが、ここでは、徹底するの意の動詞とする。副詞の用例としては、南宋・陸游「初到行在」に「筆墨有時閑作戲、功名到底は無縁（筆墨 時 有りて閑に戲を作り、功名 到底 是れ縁無し）」（『劍南詩稿』卷二十）とある。

## 【通釈】

## 「竹を移植する」

この寒い季節に「此の君」（竹）に三尺ほどの土地を分けたことを喜ぶ。真つ白な姿を梅が水面に映し出す頃、緑色の竹の影はもう空を凌ぐほど（に高い）。寂しく独り寝していても雨音を聴くのにちょうど良く、窓いっぱい風の風を貯め込むのにもまことに都合がよい。私は清らかで痩せた境地を徹底的に身につけ、あなたがたと同じくならたいのだ。

## 【備考】

淡斎の師であつた大窪詩仏の『清新詩題』夏類に、「問移竹」、また雑類に「雨中移竹」等とあることから、「移竹」というモチーフが、詩仏門下の題詠において好まれていたことが分かる。

「問移竹」とは、中唐・白居易の詩に因むであらう。

## 問移竹

竹を移すを問ふ

問君移竹意如何 君に問ふ 竹を移すに意は如何と  
慎勿排行但閑窠 慎みて排行すること勿れ 但だ窠を間にせよ  
多種少栽皆有意 多く種うるも少なく栽うるも皆 意有れど  
大都少校不如多 大都 少きは校や多きに如かず

（『白氏文集』卷五十七）  
（本堂睦季）

## 034 江村

江村

小雨 纔 後  
江天 正 斂 昏

小雨 纔 かに収まりし後  
江天 正に昏を斂む

波涵 初月 影

波は涵す 初月の影

沙疊 退潮 痕

沙は疊ぬ 退潮の痕

斷磬 松間 寺

斷磬 松間の寺

孤燈 竹外 村

孤燈 竹外の村

漁翁 罷釣 去

漁翁 釣を罷めて去り

晚飲 伴兒 孫

晚飲 兒孫を伴ふ

## 【語釈】

○江村…川辺の村。

○小雨…こさめ。南宋・陸游「初発建安」に「小雨初収雲未帰、吾行迨及晚秋時（小雨 初めて収まるも 雲 未だ帰らず、吾が行 晩秋の時に迨り及ぶ）」（『劍南詩稿校注』二〇〇五年、上海古籍出版社）卷十一とある。

○江天…川辺の空模様。南宋・陸游「病中」に「風雨暗江天、幽窓起

【韻字】 昏・痕・村・孫（上十三元韻）

復眠（風雨 江天 暗く、幽窓 起きて復た眠る）（『宋詩鈔』「劍南詩鈔」とある。

○斂昏…たそがれ時の終わり。日没後三、四十分程度の時間帯をいう。022【語釈】参照。南宋・陸游「晚興」に「興來倚杖清江上、斷角疏鐘正斂昏（興來り杖に倚る 清江の上、斷角 疏鐘 正に昏を斂む）」（『劍南詩稿校注』卷七）とある。

○波涵…波がひたす。北宋・韓維「和三兄游湖」に「波涵天影迷高下、雲覆山光變有無（波は天影を涵して高下に迷ひ、雲は山光を覆ひて有無を變ず）」（『宋詩鈔』「南陽集鈔」とある。

○沙疊の句…川の砂浜に干満の跡が幾重にも残っている、の意。

○斷磬…とぎれとぎれに聞こえる鐘の音。「磬」は、への字形をした石製の打楽器で、僧の集合合図などに使う。ここでは、平仄の都合により、「鐘」の代わりに用いたか。南宋・陸游の七律「夙興」に、「賦詩稿成棄不伝、殘鐘斷磬知誰編（詩を賦して稿成るも棄てて伝へず、殘鐘 斷磬 誰か編するを知らん）」（『劍南詩稿校注』卷三十七）とある。

○孤燈…一つ寂しく灯るともしび。『淡齋百絶』（下）084【語釈】参照。

○竹外…竹藪のむこう。『淡齋百絶』（中）047【通釈】参照。

○漁翁…年老いた漁師。漁父。明・陳獻章「詩罷懷白州先生」に「童子覓牛去、漁翁罷釣歸（童子 牛を覓めて去り、漁翁 釣を罷めて歸る）」（『鎮白沙集』卷七）とある。

### 【通釈】

#### 「川辺の村」

小雨がようやく収まった後、ここ川辺の空はちようど宵闇が迫ってきた。川面の波は三日月の影を浸してゆき、浜辺には引き潮の痕が幾重にも残っている。松林の中の寺から、とぎれとぎれに鐘の音が聞こえてきて、やがて竹藪の向こうに、ぼつんと一つともし火が見えてきた。漁父は釣りをやめて家に帰り、息子や孫を連れ添って晩酌をはじめた。

めた。

### 035 初夏書感

山村四月綠陰成  
桑者家家作伴行  
三起三眠母蠶老  
一晴一雨婦鳩鳴  
堪嗟時序頻相換

難奈襟懷動易驚

賴有家歸能遣悶  
尊羹筍鮓手親傾

### 初夏 感を書す

山村 四月 綠陰 成り

桑者 家家 伴を作して行く

三起三眠 母蠶 老い

一晴一雨 婦鳩 鳴く

なげ 嗟くに堪へたり 時序 頻りに相ひ換

はるを

いかん 奈ともし難し 襟懷 動もすれば驚き

やす 易きを

さいは 賴ひに家歸有りて 能く悶へを遣り

じゆんこう 尊羹 筍鮓 手親ら傾く

【韻字】成・行・鳴・驚・傾（下平八庚韻）

### 【語釈】

○家家…どの家でも、の意。

○作伴…一家そろって。盛唐・杜甫「聞官軍收河南河北」に「白日放歌須縱酒、青春作伴好還鄉（白日 放歌して 須らく酒を縱にす

（土山和夫）

べし、青春 伴を作して 郷に還るに好し」(『杜詩詳注』卷十二)とある。

○三起三眠…何度も起きたり寝たりする。『淡齋百絶』050【語釈】参照。

○婦鳩…雌の鳩。北宋・歐陽脩「啼鳥」に「誰謂鳴鳩拙無用、雌雄各自知陰晴(誰か謂ふ、鳴鳩 拙にして用無しと、雌雄 各おの自ら陰晴を知る)」(『宋詩鈔』「歐陽文忠詩鈔上」)とあり、鳩は天候を予知すると考えられていた。

○時序…時候の順序。

○襟懷…心中の考え。胸のうち。

○窮…酒こし、転じて酒をいう。中唐・白居易「潯陽秋懷、贈許明府」に「試問陶家酒、新蕞得幾多(試みに問ふ、陶家の酒、新蕞 幾多を得たるかと)」(『白氏文集』卷十七)とある。

○遣悶…うさを晴らすこと。鬱を散ずること。

○蓴羹…じゅんさいの吸い物のこと。西晋・張翰の「蓴羹鱸膾」の故事によつて知られる。004【語釈】参照。

○筍鮓…筍の押し鮓。「鮓」とは、本来、魚介類に塩や米粉を加えて漬け込み自然発酵させた食品をいうが、ここではタケノコの和え物をいうか。

### 【通釈】

「初夏の感慨を書す」

山村の四月は緑豊かで、養蚕農家はどの家も一家総出で桑摘みに出かけてゆく。何度も起きたり寝たりした蚕は古い、晴れや雨の日ごとに、雌の鳩が鳴く。時節がどんどん移り変わってゆくのはまことに嘆かわしく、ともすると心が感じやすくなるのを如何ともしがたい。幸い家の酒で憂さ晴らしすることもでき、じゅんさいの吸い物と筍の和え物を肴に、自らの手で盃を傾けるのだ。

(野田楓優音)

### 036 涼夜

涼夜

風約浮萍水滿塘

風は浮萍を約めて 水は塘に満ち

流螢焰冷遶疎簾

流螢 焰 冷ややかにして 疎簾を遶る

る

冰紋珍簾平欺暑

氷紋の珍簾 暑を平欺し

蟬翼輕衫占斷涼

蟬翼の輕衫 涼を占斷す

酒釣新詩眞長策

酒は新詩を釣るに 眞に長策にして

茶驅殘睡是良方

茶は殘睡を驅るに 是れ良方なり

無端半夜送山雨

端無くも 半夜 山雨を送れば

付與芭蕉恣主張

芭蕉に付与して恣に主張せしめん

【韻字】塘・簾・涼・方・張(下平七陽韻)

### 【語釈】

○約…(風が) かすめて通り過ぎる。侵す。南宋・范成大「宿清湘城外田家」に、「山迎雨脚俄横過、風約江声欲倒流(山は雨脚を迎へて俄かに横過し、風は江声を約めて倒流せんと欲す)」(『宋詩鈔』「石湖詩鈔」)とある。

○浮萍…水草の名。うきくさ。中唐・劉商「醉後」に「醒來還愛浮萍草、漂寄官河不属人(醒め來り還つて愛す 浮萍の草、官河に漂寄して人に属せず)」(『聯珠詩格』卷二)とある。

○塘…いけ、ため池。

○流螢…飛びさまようほたる。晚唐・杜牧「秋夕」に「紅燭秋光冷画

屏、輕羅小扇撲流螢（紅燭の秋光 画屏に冷やかに、輕羅の小扇  
流螢を撲つ）（『全唐詩』卷五二四）とある。

○疎簾…まばらに生えた竹藪。

○冰紋…氷の表面にできる紋様。003【語釈】参照。

○珍簾…美しい竹むしろ。中唐・李益「写情」に「水紋珍簾思悠悠、  
千里佳期一夕休（水紋の珍簾 思ひ悠悠たり、千里の佳期 一夕  
休む）」（『三體詩』卷一）とある。

○平欺…侮る、小馬鹿にする。南宋・陸游「夏日湖上」に「迎風枕簟  
平欺暑、近水簾櫳探借秋（風を迎へし枕簟 暑を平欺し、水に近き  
簾櫳 秋を探借す）」（『劍南詩稿校注』卷一）とある。

○蟬翼…蟬の羽。軽いもの、薄いものの喩え。南宋・陸游「連日治  
圃、至山亭又作五字」に、「薄命元知等蟬翼、畏途何處不羊腸（薄  
命 元より知る 蟬翼に等しきを、畏る 途 何れの処か羊腸なら  
ざらん）」（『宋詩鈔』「劍南詩鈔」）とある。

○輕衫…夏のうすい上衣。

○占斷…しめつくす。悉く占有する。『淡齋百絶』（下）061【語釈】参  
照。

○酒釣新詩…酒が新しい詩句を着想する妙案になるということ。「釣  
詩鈎（詩を釣り上げる釣針）」とは、酒の別名。北宋・蘇軾「洞  
庭春色」に「応呼釣詩鈎、亦号掃愁帚（応に〈詩を釣る鈎〉と呼ぶ  
べし、亦た〈愁ひを掃く帚〉とも号す）」（『蘇文忠公詩合注』卷三  
四）とあるのに基づく。

○長策…すぐれたばかりのこと。良策。

○驅…追いやる。追い払う。

○無端…思いもよらず。『淡齋百絶』（下）067【語釈】参照。

○主張…主宰する。南宋・陳郁「苦吟」に「閉門不受庭前月、分付梅  
花自主張（門を閉ざし庭前の月を受けず、梅花に分付して自ら主張  
せしむ）」（『聯珠詩格』卷十八）とある。

# 【通釈】

## 「涼夜」

風は浮き草の上をかすめ、池には水が満ちている。舞い飛ぶほたる  
の光は、ひんやりと竹藪のあたりをめぐっている。氷紋のような珍し  
い竹むしろは、暑さを小馬鹿にするくらい、蟬の羽のような夏のうす  
い服は、涼味を独占させてくれる。（蘇東坡がいったように）酒は新  
しい詩を釣り上げるのに、まことに良い計略であり、茶は眠気を追い  
やるのに、良い処方箋である。思いがけず、夜半、山雨が通り過ぎる  
のを見送った。あとは、芭蕉に分け与えて、彼らの好き勝手にさせよ  
う。

（多胡遥菜）

## 007 伊香保温泉

伊香保温泉

西日全沈斂落霞  
涼風洗熱晚愈加  
履聲月散雲邊市  
簾影秋搖水外家  
只有琴書消寂寞  
曾無蟲鳥鬪喧嘩  
自嗤客子忘情久  
閑卻漫山夜合花

西日 全て沈んで 落霞を斂む  
涼風 熱を洗ひて 晩に愈いよ加ふ  
履声 月に散ず 雲辺の市  
簾影 秋に揺る 水外の家  
ただ琴書の寂寞を消す有り  
曾て虫鳥の喧嘩を鬪はす無し  
自ら嗤ふ 客子 情を忘れて久しく  
漫山 夜合の花を閑却するを



## 【韻字】霞・加・家・嘩・花（下平六麻韻）

## 【語釈】

○伊香保温泉…群馬県渋川市、榛名山の東斜面にある温泉町。

○落霞…夕焼け。

○履聲…履のおと。「履」とは靴、草履、履物のこと。

○雲邊…雲のほとり。雲のたなびくあたり。

○琴書…琴と書籍。弾琴と読書。

○寂寞…ひっそりとして淋しいさま。又、形も声も無いさま。

○客子…旅人。ここは、伊香保に遊ぶ作者自身を指す。

○喧嘩…かまびすしい。又、やかましく言いたてる。

○忘情…人としての喜怒哀楽の情を忘れる。南宋・陸游「小市」に

「薄暮归来漁火鬧、放翁自笑欲忘情（薄暮 帰り来れば 漁火 鬧

し、放翁 自ら笑ふ 情を忘れんと欲すと）」（『宋詩鈔』「劍南詩

鈔」とある。

○閑卻…なおざりにする。捨てておく。

○漫山…山いっばいに。「漫」は、遍く、の意。

○夜合花…合歓の花の異名。ねむは、別名、ねぶた、ねぶりのき、ね

ぶり。マメ科の植物で、山野に自生する落葉喬木、夏に淡紅色の花

を開く。夜間、葉と葉が合して眠ることから「夜合花」また「合

昏」とも呼ばれ、男女の情愛のシンボルとされる。南宋・陸游「白

樂天詩云……為賦小詩以寄感歎」に「繡床倦倚人何在、風雨漫山夜

合花（繡床 倚るに倦むに 人 何くにか在る、風雨 漫山 夜合

の花）」（『宋詩鈔』「劍南詩鈔」とある。

## 【通釈】

「伊香保温泉」

西日は完全に沈んで、夕焼け雲も姿を消し、熱を洗い去る涼風が夜  
になってますます強くなった。雲の高さにあるこの集落では、月が上

るとともに、外を歩く靴音も聞こえなくなり、川向こうの家々では、  
秋風が簾の影を揺らしている。ここでは、琴と書だけが寂寞をなぐさ  
めてくれ、虫や鳥がやかましく争うところも一切無い。我ながら可笑  
しいのは、情を忘れて久しい旅人の私は、山に満ち満ちている、（情  
愛のシンボルである）夜合の花さえもすっかりなおざりにしてしまっ  
たことだ。

(柳沢祐奈)

## 038 伊香保温泉 其二

伊香保温泉 其二

山深節候自然殊

山 深くして 節候 自然と殊なり

嵐氣凄然未慣膚

嵐氣 凄然として 未だ膚に慣れず

嶺上雲來埋偃蓋

嶺上 雲 来たりて 偃蓋に埋れ

林間日照現跳珠

林間 日 照らして 跳珠 現はる

消殘暗壁舊詩句

消殘す 暗壁の旧詩句

平展明窗活圖畫

平展す 明窓の活図画

新綠重重遠樓處

新緑 重重として 楼を遠る処

坐聽六月老鸞呼

坐ろに聴く 六月 老鸞の呼ぶを

【韻字】殊・膚・珠・畫・呼（上平七虞韻）

## 【語釈】

○節候…季節時候。

○嵐氣…山中の空氣。青々とした山氣。008【語釈】参照。

○凄然…ひえびえとしたさま。

○偃蓋…①ふせた笠、②笠をふせたような形、の両義があるが、②をとる。ここでは、笠を伏せたような松の木立をいう。盛唐・張説「遙同蔡起居偃松篇」に「懸池的的停華露、偃蓋重重弘瑞雲（懸池的的として華露を停め、偃蓋 重重として瑞雲を弘ふ）」（『唐詩選』卷五）とある。

○跳珠…真珠をまき散らすさま。ここは、太陽に照らされて光る雨粒をさす。中唐・錢起「蘇端林亭對酒喜雨」に「濯錦翻紅蕊、跳珠乱碧荷」（濯錦 紅蕊を翻し、跳珠 碧荷を乱す）（『全唐詩』卷一）とある。

○消殘…元あつたものがほとんど消えかかっていること。

○平展…ピンとしき広げる。「平」は、ピンと平らかに。中唐・白居易「奉和汴州令狐令公二十二韻」に「平展糸頭毯、高褰錦額簾（平らかに展ぶ 糸頭の毯、高く褰ぐ 錦額の簾）」（『白氏文集』卷二十四）とある。

○重重…いくえにもかさなる様。

○活圖畫…生き生きと描かれた絵画。

○新緑の句…子類特殊形式（挟み平）。

○坐…「そごろに」と訓み、なんとはなしに。自然に。

○老鷲…老いたうぐいす。春過ぎてなお鳴く鷲。

### 【通釈】

「伊香保温泉 其の二」

山が奥深いので、季節の変化は他とはおのずと異なっている。山中の空氣は冷え冷えとしていて、いまだに肌がなじまない。峠に雲がやってきて、笠をふせたような松を覆いつくしたかと思えば、木々の合間に陽光が差し込み、滴り落ちる雨粒を跳ねる真珠のように映し出

す。暗い壁に書き付けられたかつての詩句はほとんど消えかかっている、明るい窓からのぞく風景は生き生きと描かれた絵画のようだ。新緑は重なり合つてこの楼閣を取り囲んでおり、何するともなく、六月なのになおも鳴く老いた鷲の轉りに耳を傾ける。

（久木原瑠樹）

### 039 伊香保温泉

#### 其三

伊香保温泉 其の三

呼○ 杯○ 危○ 坐○ 半○ 天○ 樓○	杯○ を○ 呼○ び○ 危○ 坐○ す○	半○ 天○ の○ 樓○
酒○ 幔○ 垂○ 檐○ 簾○ 上○ 鉤○	酒○ 幔○ 檐○ に○ 垂○ る○	簾○ 上○ の○ 鉤○
空○ 翠○ 連○ 沾○ 硯○ 池○ 面○	空○ 翠○ 連○ に○ 沾○ す○	硯○ 池○ の○ 面○
亂○ 雲○ 乍○ 抹○ 屋○ 山○ 頭○	亂○ 雲○ 乍○ ち○ 抹○ ふ○	屋○ 山○ の○ 頭○
當○ 窗○ 飛○ 瀑○ 四○ 時○ 雪○	窓○ に○ 當○ る○ 飛○ 瀑○ は○ 四○ 時○ の○ 雪○	
灑○ 檻○ 清○ 風○ 六○ 月○ 秋○	檻○ に○ 灑○ ぐ○ 清○ 風○ は○ 六○ 月○ の○ 秋○	
縱○ 是○ 靈○ 泉○ 能○ 起○ 廢○	縱○ は○ 是○ れ○ 靈○ 泉○ 能○ く○ 廢○ を○ 起○ こ○ す○ と○ も○	
煙○ 霞○ 痼○ 疾○ 得○ 醫○ 不○	煙○ 霞○ の○ 痼○ 疾○ 医○ し○ を○ 得○ る○ や○ 不○	

【韻字】樓・鉤・頭・秋・不（下平十一尤韻）

### 【語釈】

○危坐…正しくきちんとすわること、正坐。南宋・楊万里「感秋五首」其二に「鹽漱已云畢 危坐正冠衣（鹽漱 已に云に畢はり、危坐して冠衣を正す）」（『楊万里集箋校』卷二五）とある。

○半天…空高くそびえること。

○酒幔…酒屋の入り口、あるいは店先に掛かる（酒屋を表す）旗やのぼり。

○空翠…雨に洗われて塵をとどめず、あたりに滴るような木々の翠色。盛唐・孟浩然「題義公禪房」に「夕陽連雨足、空翠落庭陰（夕陽雨足に連なり、空翠庭陰に落つ）」（『唐詩選』卷三）とある。

○屋山…屋根の棟のてっぺん。001【語釈】参照。

○空翠の句…「はさみ平」。

○硯池…硯を洗う池。場所、不詳。南宋・陸游「題齊壁」に「香岫火深生細靄、硯池風過起微瀾、（香岫火深くして細靄生じ、硯池風過ぎて微瀾起る）」（『劍南詩校注』卷三十）とある。

○亂雲…空全体を覆い、暗灰色をした雲、雨雲または雪雲とも呼ばれ、降水をもたらす雲の代表格である。

○飛瀑…高いところから落ちるたき。

○四時…春夏秋冬のこと。

○灑…本来、水で洗い清めるの意。ここでは、風が吹き清めること。

盛唐・李白「古風五十九首」其十一に「清風灑六合、邈然不可攀（清風六合（全世界）に灑ぎ、邈然「遠い彼方」として攀つべからず）」（『李太白集』卷一）とある。

○檻…手すり。欄檻。

○清風…すみきつて、さわやかな風。東晋・陶淵明「飲酒二十首」其十七に「幽蘭生前庭、含薰待清風（幽蘭前庭に生じ、薫りを含みて清風を待つ）」（『靖節先生集』卷三）とある。

○靈泉…靈験あらたかな泉。ここでは、伊香保温泉をさす。

○起廢…すたれたものも助け起す。ここでは、動けなくなった病人を助けるようになること。

○煙霞痼疾…自然の趣を愛し、そのような所に旅をする習癖。「煙霞」は、山水。「痼疾」は、ながわすらい。南宋・范成大「初入大峨」

に「煙霞沈痼不須医、此去真同汗漫期（煙霞の沈痼「山水の美景に魅入られ、それが長患いといえるまで常軌を逸している意」）医を須ひず（医者要らず）、此より去りて真に汗漫の期（天の果てで神仙と会う約束）に同じからん）」（『石湖詩集』卷十八）とある。また、淡齋が「煙霞」を愛したことは、朝川善庵「桐生故詩人佐羽淡齋君墓記」（『淡齋百絶』（下）所収）に、「性好山水、癖耽煙霞（性山水を好み、癖煙霞に耽る）」とある。

#### 【通釈】

「伊香保温泉 其の三」

空高くそびえる楼閣で正坐して酒を呼びよせると、酒店の旗が軒下の簾かけまで垂れている。そびえる木々の緑が、硯池の表面にしきり映え、雨雲がさつと屋根の棟の上を通り過ぎる。窓に当たる滝のしぶきはさながら雪のようで、欄に吹きよせる爽やかな風は、夏六月なのに秋を感じさせる。たとえこの靈験あらたかな温泉（の効用）が病人を助けるようにすることができるとしても、自然の趣を愛し、旅をする（私の）習癖を治すことはできるのだろうか。

（桐原基範）

#### 040 伊香保温泉

##### 其四

伊香保温泉 其四

屋角輪困樹影敬	屋角輪困にして樹影敬き
雲邊鐘動晚炊遲	雲辺鐘動きて晚炊遅し
夢驚深谷生風處	夢は驚く深谷風を生ずる処
酒醒尖峯吐月時	酒は醒む尖峯月を吐くの時

吟思<sup>ぎんし</sup>自<sup>より</sup>憑<sup>よ</sup>孤枕<sup>こちん</sup>伴<sup>ともな</sup>  
 羈愁<sup>きしゆう</sup>唯<sup>ただ</sup>許<sup>いっとう</sup>一燈<sup>し</sup>知<sup>ゆる</sup>  
 杜鵑<sup>とけん</sup>啼<sup>な</sup>徹<sup>とほ</sup>知<sup>し</sup>何意<sup>なんい</sup>  
 似<sup>と</sup>說<sup>と</sup>歸家<sup>に</sup>已<sup>き</sup>誤<sup>あやま</sup>期<sup>ま</sup>

吟思<sup>ぎんし</sup> 自ら<sup>みづか</sup>孤枕<sup>こちん</sup>の伴<sup>ともな</sup>に憑<sup>よ</sup>り  
 羈愁<sup>きしゆう</sup> 唯<sup>ただ</sup>一灯<sup>いっとう</sup>の知<sup>し</sup>るを許<sup>ゆる</sup>すのみ  
 杜鵑<sup>とけん</sup> 啼<sup>な</sup>き徹<sup>とほ</sup>すは 知<sup>し</sup>るや何<sup>なん</sup>の意<sup>い</sup>ぞ  
 説<sup>と</sup>くに似<sup>に</sup>たり 歸家<sup>きか</sup> 已<sup>すで</sup>に期<sup>き</sup>を誤<sup>あやま</sup>てり  
 と

【韻字】 敬・遲・時・知・期（上平四支韻）

### 【語釈】

○屋角…屋根のかど。また家のかど。 盛唐・杜甫「雨過蘇端」に、「紅稠屋角花、碧秀牆隅草（紅は稠し 屋角の花、碧は秀つ 牆隅の草）」（『杜詩詳注』巻四）とある。

○輪困…①高大なさま、②屈曲したさま、の意があるが、ここでは②をとる。王友山（時代未詳）「老梅」に「眼底庭梅六十春、當時初見已輪困（眼底の庭梅 六十の春、当時 初めて見し時 已に輪困なり）」（『聯珠詩格』巻十二）とある。

○敬…かたむく。

○鐘動…鐘が鳴る。南宋・陸游「自妙相歸、將至杜浦堰、舟中作」に「寺閣疎鐘動、漁村遠火明（寺閣 疎鐘 動き、漁村 遠火 明らかなり）」（『劍南詩鈔』巻十四）とある。

○夢驚…夢が破られる。目を覚ます。北宋・孔武仲「旅枕」に、「旅枕春風底、條然一夢驚（旅枕 春風の底、條然として一夢 驚く）」（『宋詩鈔』「清江集鈔」）とある。

○吐月…月が出る。盛唐・岑參「夜宿龍吼灘、思峨嵋隱者」に、「水煙晴吐月、山火夜燒雲（水煙 晴れて月を吐き、山火 夜 雲を燒く）」（『三體詩』巻三）とある。

○孤枕…旅のひとり寝。009【語釈】 参照。

○羈愁…旅の愁い。北宋・蘇軾「次送酒韻」に「万斛羈愁都似雪、一壺春酒若為湯（万斛の羈愁 都て雪に似、一壺の春酒 湯たるがごとし）」（『聯珠詩格』巻七）とある。

○許…あてにする。期待する。

○杜鵑…ほととぎす。望郷のシンボルとして詩に詠われる。『淡齋百絶』（上）020【語釈】 参照。

○啼徹…啼き徹す。「徹」は、「通」の意。

○誤期…時期に遅れる。時期を逸する。

### 【通釈】

「伊香保温泉 其の四」

屋根の角は屈曲し、樹木の影がそこに寄り添う頃、遠く雲の辺りにある寺の鐘が鳴り、周りの家いへは遅い夕餉の仕度をする。深い谷から吹き来る風に吹かれて夢から覚まされ、尖った峯から上る月を見て酔いから醒まされる。詩歌への思いは旅の枕だけが頼みの伴侶となり、旅の愁いはこの灯りだけが心底理解してくれる。ほととぎすが啼き徹すのはなぜなのだろうか、（私が）すでに帰郷の時期を逸してしまった、と言っているかのよう。

（野田菜桜子）

### 【謝辞】

この度の訳注作成に際し、底本『淡齋百律』の撮影をはじめとして、諸々の便宜をはかっていただいた、高崎市立図書館に謹んで御礼申し上げます。

